

佐々木彩「災害ボランティアの現状と意義～栃木県を例に～」

1、はじめに

平成23年3月11日に起こった東日本大震災は大きな揺れと津波により東北地方を中心に大きな被害をもたらした。家が津波によって流された人、家は残っても住める状態ではない人などが3か月たった今も避難所での暮らしを強いられている。この震災の規模から、行政では手におえない部分が多く、そこで活躍しているのが災害ボランティアである。なかでも私は栃木県における災害ボランティアに関して詳しく見ていきたいと思う。なぜなら、栃木県も東北に比べ被害は少なかったものの、地震の被害を受けた地域であり、栃木県内で行うボランティア・被災地へ向かうボランティアの両立、また、被害を受けた県だからこそ応援するやり方があるのではないかと思ったからだ。

2、ボランティアとは

“ボランティア”の語源は、自由意志という意味の「ボランタス」と言われており、そこからフランス語で喜びや精神という意味の「ボランテ」となり、アメリカで「ボランティア」という言葉が使われ、広く認知されるようになったと言われている。一般的に「自発的な意志に基づいて人や地域社会に貢献すること」といわれている¹。ボランティアと一言で言っても収集活動・寄付、施設でのボランティア、地域でのボランティア、趣味や特技を活かしたボランティア、専門技術を活かしたボランティアなどさまざまであり、自分が行いたいこと、得意なことを生かし選択して行うことができる²。災害ボランティアは地震、台風などによる水害、火山の噴火などの自然災害が起こったときに行うボランティアであり、他のボランティアと比べ危険が伴うことから十分に注意する必要がある³。

3、全国的にみたボランティアの現状

朝日新聞によると、6月19日現在、岩手県、宮城県、福島県でボランティアを行った人はのべ42万人である⁴。ボランティアの仕事としては各家庭のがれき撤去、泥だし、家具・食器の洗浄、避難所の手伝いが主な仕事である。また、震災から3か月がたち、被災者がボランティアに求めるものも変わってきているように感じる。宮城県石巻市では青空美容室が開かれた⁵。また、岩手県大船渡市ではボランティアが岩手県平泉の紙芝居を発表した⁶。生きることに精一杯だった被災者たちも髪を整え、身だしなみに気を配ったりする機会を得たり、心に少しの安らぎを得たりできているのもボランティアのおかげといえるであろう。一方で問題もある。被災地でのボランティアが減少傾向にあることである。ボランティア不足の背景には、現地へのアクセスの難しさがある。大都市で起きた阪神大震災と違い、今回の被災地は都市部から遠く、広い。宿泊施設のない集落も多く、安全面からテン

ト設置や車中泊を認めない自治体も多い。そうした中でボランティアの確保に威力を發揮したのが、全国の社会福祉協議会などが出すボランティアバスである。仕事の関係から長期のボランティアには行けない人は日帰りバスを利用することが多く、宮城県では5月末までに約6000台のバスで計1万6000人が現地入りした。しかし、関西では申し込み15分で枠が埋まるほど人気ではあったが運行代や職員の派遣が重荷になっていることを理由にボランティアバスの運行をうち切る動きが出てきている。しかし、被災地では今なおボランティアを求めている、被災地に向かったボランティアは予定より多く仕事をするところもある⁷。

4、栃木県として行っているボランティア

栃木県ホームページによると、栃木県では平成7年の阪神大震災において約140万人のボランティアが活動したこと、平成10年8月末の県北地域の豪雨災害の時に、13日間で延べ6600人のボランティアに協力してもらったことから、災害時の混乱した中でもボランティア活動が円滑に行えるよう、平成14年7月1日に「栃木県災害ボランティア登録制度」を創設し、登録を開始した。この制度は、登録したボランティア同士が普段からの情報交換を通して、お互いに顔の見える関係づくりを支援するために設けられたものである。登録後の活動はボランティアたちで自主的に行うというものである⁸。

東日本大震災をきっかけに行われているボランティアは主に2つでとちまる募金と被災地から避難してきた方の避難所等の支援ボランティアである。とちまる募金は被災した方が栃木県内での生活を支援するためのものである。6月24日現在、6億3641万7898円の募金が集まっている⁹。また、栃木県内に避難してきていた方々は親戚の家やアパート、被災した自宅にそれぞれ戻り、各避難所は封鎖された。避難所を運営するのにあたり、各自治体の職員では人出がたらないことからボランティアを募集した。主に管理・運営を行っていた。そのほかにも震災前からいろいろな施設に行きボランティア活動を行っていた学生団体などが避難所で足湯やマッサージを行った。これは心身共に癒し、また栃木県に対してよいイメージをもってもらえたのではないだろうか。

5、民間団体の活動

私は宇都宮市社会福祉協議会内にあるボランティアセンターを訪ね、お話を聞くことができた。ボランティアセンターでは「ボランティアを始めたい」「ボランティアを頼みたい」「ボランティアグループの情報を知りたい」など、ボランティアに関する相談や、ボランティア活動の紹介を行っている。現在主体となっていて行っている災害ボランティアは宮城県石巻市への日帰りボランティア活動であり、津波被害を受けた家屋の家財道具・畳の搬出、泥だし、河原掃除などを行っている。ボランティア先をどのように決めるのか尋ねたところ、被災地の各災害ボランティアセンターへ行きたい日にちを伝え、受け入れてくれる地域へ向かうとのことであった。また、県内でも被害があり、高齢者など支援を必要として

いる世帯を募集し、ボランティアを派遣している。地震以降こちらへのボランティア登録は1000人に達し、これ以上は無理だと判断したそうである。登録の際には得意なこと、苦手なこと、要望を聞いておき、それに合わせて派遣を行っているようだ。たとえば、被災地に行くほどの体力はない、家を離れられない、学生で放課後に活動したいという要望をもっている人には4で紹介した栃木県内の避難所へのボランティアを紹介したようだ。また、派遣先によってセンター内にいるボランティアコーディネーターが男女比や、経験者・初心者の割合の調整を行っているようだ。災害ボランティアを行ううえで重要なのが保険の加入である。宇都宮市民はもともと市が保険料を払い、ボランティア用の保険に加入しているようだ。しかし、金額が少なく、対象とならない活動もあるため、社会福祉協議会が行っている保険の加入も進めているようだ。前述したように、今回の地震をきっかけにボランティアセンターへの登録者が大幅に増えた。今までの登録者と違いがあるかとたずねてみた。今までのボランティア活動は子供のお世話や高齢者介護のボランティアなどでおだやかな人が多かったようだ。それに対し、被災地へのボランティアに応募してくる人はすぐにでも行きたい、みんなを元気にしたいという人が多く、明るさや機敏さが被災地の方を元気づけるのではないかと話してくださった。こちらのボランティアセンターは他のボランティア団体よりも被災地に向かうのが遅れ、4月末から派遣したようだ。正確な情報が受け取りにくかったこと、被災地の受け入れ態勢が整わなかったことと共に、栃木県にも被害を受けた地域があり、そちらと両立しなければならなかったことが理由だそうだ。職員の方はすぐに向かう団体もあるが、待つこともボランティアの仕事だと教えてくださった。

一方で3月17日に被災地にボランティアに行った団体もある。栃木県内のボランティア団体は個別に活動するのではなく、常に連絡をとりあっているため、登録した団体先で日時や仕事内容が合わなかったとしても他の団体が企画しているボランティアを紹介してもらうことができるようだ。団体によって経験年数も異なるため、教え合う関係もできているという。現在たくさんの団体で呼びかけられているのは「栃木からボランティア2万人」キャンペーンである。震災後、津波で浸水被害にあった未だ大量の土砂・汚泥が堆積しており、泥は時間がたつと固くなってしまふ。泥の撤去作業は時間との勝負であるが人手がまったくたりてないため栃木から被災地へ、1日でも早く被災地の方が安全に住める状態に戻すための活動を行おうとしている。栃木県の200万県民のうち、1パーセントにあたる2万人を当面の目標にボランティアを募集している¹⁰。プロモーションビデオを作ったり、それぞれの団体が企画しているボランティアバスの運行日を一つの紙にまとめ、配布している。これにはJTBもかかわっておりバスを出している。

6、まとめ

今回の地震により今でもたくさんの方が苦しんでいる。被災地域の行政も完璧に戻ったとは言えない。そこで力になるのが災害ボランティアだと思う。私は宮城県出身で今は栃

木県に住んでいる。自分の出身の県に今住んでいる県がボランティアとして活動してくれることはとてもうれしいことである。栃木県内でも被害があり、揺れも大きかったため、地震の恐怖を身をもって感じたと思う。より危険な場所に支援に行く恐怖もあるだろうに希望者が殺到するほどボランティアをしたいという人が多い。ボランティアセンターの人は人数が多く打ち切りってしまって申し訳ないとお話しされていた。被災地ではまだボランティアを必要にしているのに対し、手一杯の団体もある。団体が自分たちが受け入れられる人数を把握し他団体と連携をとり、多くの人にボランティアに行ってもらいたいと思う。また、3で示したように交通の問題があり日本全国から被災地に向かうのは難しい状況である。栃木県は高速道路を使えば4時間ほどで被災地に向かうことが可能で、日帰りも難しいことではない。率先して行うことができるだろう。栃木県は自然災害を受けたことが少ないがこのようにたくさんの人が参加してくれるのは驚きもあり、うれしくもあるとおっしゃっていた。確かに、宮城県に住んでいたころは地震がよく起こり、山の近くだったため、土砂崩れがおきたなど聞いていたが、栃木県にきてみると、地震はめずらしいものになってきたように思う。宇都宮市ボランティアセンターは毎年災害ボランティアの講習会が行われているが、昨年までは人数が集まらなかったのに対し、今年は募集するとすぐ定員に満たしたそうだ。栃木県民の災害ボランティアの必要性を感じ役に立ちたい、という意識にかわってきたのではないかと私は思う。ボランティアを行うにあたり、食事や作業着などは自己負担になり、多少の出費が伴う。しかしそこでもひるまず、被災地に向かう気持ちは栃木県内にも良い影響をもたらすだろう。被災者の気持ち、支援するほうの気持ち、両方が理解できる栃木県は被災地、そして日本を元気にする力を十分持っているだろう。

また、今回のレポートでは主に被災地へ向かう災害ボランティアについて述べたが、募金や物資を送るなど栃木県内でできるボランティアもたくさんある。みなそれぞれに生活環境、状況、目的にあわせ、無理のないボランティアを長期的に行うことが被災地の方が一番喜ぶのではないかと私は考える。

レポート作成にあたり宇都宮市ボランティアセンターの方がお話を聞かせて下さった。本当にありがとうございました。

1 宇都宮市ボランティアセンター「ボランティアってなに？」

<http://park14.wakwak.com/~volunteer/whats/index.html>

2 宇都宮市ボランティアセンター「どんなボランティアがあるの？」

<http://park14.wakwak.com/~volunteer/whats/bunrui.html>

3 暮らしの All About「災害ボランティアの基本」

<http://allabout.co.jp/gm/gc/1646/>

4 asahi.com 平成23年6月19日

「ボランティア足りない 参加のべ「阪神」の3分の1」

<http://www.asahi.com/special/10005/OSK201106180141.html>

5asahi.com 平成23年5月19日「青空美容室でさっぱり 石巻の避難所」

<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201105180680.html>

⁶ asahi.com 「戦乱から復興、「平泉」テーマに紙芝居 岩手大船渡」

<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201105080397.html>

⁷ 4と同じ

⁸ 栃木県 「災害ボランティア登録制度」

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/c02/system/honchou/honchou/borantia.html>

⁹ 栃木県 「東北地方太平洋沖地震の被災者支援義援金（とちまる募金）の募集」

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/kinkyu/gienkin.html>

¹⁰ とちぎボランティアネットワーク

「東日本大震災 栃木からボランティア2万人を被災地へ！」

<http://www.311alltochigi.com/>

すべて平成23年6月27日確認